



姉のSummer!2
おん♡ま〜!

著：沖田和彦
画：すめらぎ琥珀
原作：あるてみす。



ぶちばら文庫

楽しい夏休みが、とんでもないことになってしまった。
 猶予をもらったとはいえ、相手は音羽だ。人間としての基本性能に差がありすぎて、百
 年かかっても勝てる気がしない。

(まあ、明日になったら、なんか思いつくだろう)

樂觀的に考えることにして、いつものように問題を先送りにした。

うーん、と湯船の中で背伸びをする。

うだるような暑さの中を連れまわされたり、竹刀でたたきのめされたりで、今日はさん
 ざんな目に遭わされたのだ。

毛穴という毛穴から、疲れの成分が流れていくようで気持ちよかった。

「さかなさかなさかなー」

思わず鼻歌が出たとき――。

「祐ちゃん、お風呂は身体を綺麗にしてから浸かるものよ？」

「うわあああっ!!」

驚いてふり返ると、そこに全裸の音羽がいた。

「な、なんで、音姉がここに!」

「お風呂に入るためでしょ？」

音羽は、にっこりと微笑んだ。

神社では本気でぶちのめしたくせに、それを忘れたかのようにサバサバしている。勝負
 の厳格さと弟への親愛表現は別なのだろう。

「いや、そうじゃなくて……」

祐太は、姉の裸身から視線をそらした。

湯気に霞む白い肌は、つきたての餅のように柔らかかそうだった。胸と尻は豊かに盛り上
 がり、腰は思いつきりくびれている。

圭と比べても見劣りしないプロポーシオンだ。

「あら、姉弟なんだから、恥ずかしがることないでしょ？ だいたい、昔はよくいっしょ
 に入ってたでしょ？」

「そ、それはそうだけど……」

今と昔はちがう。

祐太も子供ではないのだ。

「私はね、ひさしぶりに再会した弟の背中でも流しながら、どれほど肉体的に成長したの
 か見ただけよ!」

音羽は、大きな胸をそらして大威張りだ。

(そういえば、去年も似たようなことが……)

祐太は、ふいに思い出していた。



一年前の夏は、圭に勉強を教わるために、この家に泊まった。
その最初の夜だ。

祐太との再会を祝して酔っぱらってしまった圭は、音羽と同じ理屈を言い張って、祐太を風呂へ引っぱっていったのだ。

「とにかく、問答無用!」

「うわっ」

祐太は、強引に湯船から引きずりだされた。

「ほらほら、じつとしなさい」

脆弱な弟としては、本家姉に抵抗する術はない。

椅子に座らされ、おとなしく髪の毛が洗われることになった。

「ふんふんふーん」

「……音姉、楽しそうだね?」

細い指が祐太の髪に潜り、しゃかしゃかと地肌をマッサージしてくれる。それが気持ちよくて、祐太は思わずうっとりしかけた。

ざばー、と湯をかけられて、頭からシャンプーを洗い流された。

「お客様、他に痒いところはありますか?」

「ないです」

「本当？」

音姉の手が、するりと弟の股間に伸びてきた。

「ちょ、ちよつと！」

祐太は狼狽したが、ふふつ、と音羽は悪戯っぽく笑った。

ボリユームたつぶりの乳房を、むにゅり、と二つとも祐太の背中に押しつけながら、片手で男子の生殖器をいじりまわす。

「お、音姉……ううつ」

屹立しかけたところで、ずるりと包皮を剥かれてしまった。

「ほら、ここは垢がいっぱいなんだから、ちゃんと綺麗にしなきゃダメでしょ？ お姉ちゃん

さんが洗い方を教えてあげるからね」

「あつ……そ、そんなこと……んんつ」

巧みにベニスをしごかれ、祐太は悦樂に喘いだ。

音羽の柔らかな手には、いつのまにかリンスがまぶされていた。亀頭にしなやかな指先が絡みつき、ぬるりぬるりと気持ちよく滑る。

子供のころに、風呂で頭や背中を洗ってもらったことはあった。が、こんなことをされたのは初めてのことだった。

もはや、姉弟のスキンシップという範疇を軽々と逸脱している。

「あら、こんなに硬くしちやつてー。このほうが洗いやすいけどね」

「ああつ」

きゅんつ、と敏感なくびれを擦られて、祐太の下半身がビクビクと痙攣する。

「さあ、祐ちゃん……もつと綺麗にしましょうね」

祐太は、洗い場に押し倒されてしまった。

「音姉……」

興奮で頭に血が昇り、はあ、はあ、と息が勝手に乱れてしまう。

弟から抵抗の意志が蕩けたことを確認して、音羽は満足そうだった。手際よく石鹸を泡立てて、豊満なボディに塗りたいくりながら、祐太の隅から隅まで舐めるように視線を這わせた。

「こんなに立派に成長してくれて、お姉ちゃんも嬉しいわ」

男が正常位で繋がるときのように、仰向けに寝転がった祐太の膝を開かせて、するりと身体を滑り込ませる。

くちゅ……。

泡だらけの乳首が、祐太の胸板に二つとも着地する。

「ああ……」

祐太は、思わず吐息を漏らしていた。

そのまま乳房を押しつけられて、むにゅり、と潰れた。淫らに形を歪ませ、音羽が上半身をスライドさせるたびに、コロコロと尖った乳首が転がる。

強気で、プライドの高い姉が、美の女神のようなボディを駆使して祐太を洗ってくれているのだ。妖しい性感に痺れて、ますますペニスが猛々しくなった。

「どう？ 気持ちいい？」

「う、うん……すごく……」

かすれた声で、祐太は答えた。

「じゃあ、祐ちゃんも……洗って」

照れ臭そうに微笑んで、音羽は上半身を離れた。たわわに実った巨乳が、ぷるんつ、と重たげに揺れる。生唾を飲み込み、祐太は反射的に手を伸ばしかけた。

「そうよ。手で掴んでみなさい」

祐太はうなずき、両手で恐る恐る掴んだ。

「そんなんじゃダメよ。もっと泡立てて洗わなくちゃ」

「……どうやって？」

「揉みなさい」

許可が下りたことで、祐太は遠慮なく揉みはじめた。

吸いつくような感触で、圭とは別の魅力があった。大きさと張りは圭がやや上だったが、

どこまでも柔軟に受け入れてくれそうな包容力に満ちている。

祐太の指が、きゅつ、と乳首を挟んだ。

「んっ、ふふ……」

音羽は、幸せそうに目を細めた。

「ねえ、もっと気持ちいいことさえない？」

「……かなり」

充血したペニスが姉の下腹部に圧迫され、今にも破裂しそうになっていた。

「素直でよろしい。さすが、私の弟」

音羽は、本格的に動きはじめた。

祐太の太ももを抱え、正常位で犯すようにヒップを前後にふりたくる。くちゅつ、くちゅつ、くちゅつ、とリズムカルな音が浴室に響いた。

「んっ、あっ、ああっ、あっ」

柔らかな下腹部でペニスを摩擦されて、祐太は女の子のように喘いだ。



「は、激し……激しすぎるよ！」

「そう？ おちんちんは嬉しそうよ？」

音羽は舌なめずりして、祐太の乳首に吸いついた。

「んあぁっ」

「祐ちゃん、可愛い声ね」

音羽の声も性的な興奮で昂っていた。

弟の小さな乳首を舐めまわし、舌で転がしながらも、腰を巧みに使って肉棒を刺激しつづけている。ぐりぐりとこねるような緩急自在の螺旋運動だ。祐太の太ももで姉の陰毛が擦れ、それも新鮮な性感になっていた。

「んっ、んん、んっ」

気持ちよすぎて、祐太の腰も勝手に動いてしまう。

「すごい、祐太のおちんちんが震えてる！ ほら、我慢しないでいいのよ！ 出そうになったら、出しちゃいなさい！」

切れ長の瞳がキラキラして、音羽は頬を上気させていた。

「で、でも……！」

たしかに、射精衝動は限界を突破しそうなほど強烈にせり上がっていたが、さすがに姉の腹部への発射はためらわれた。

「実の姉に、なに遠慮してるの？」

実の姉だから問題なのだ。

祐太はそう叫びたかったが、そんな余裕はない。歯を食いしばり、身体をのけ反らせ、暴れる性本能と必死に戦っていた。

「んもー、しょうがないわね！」

なにを思いついたのか、ニヤ、と音羽は笑った。

重たげなヒップを浮かして、祐太の片足にまたがり、両手でしがみつくようなスタイルになった。それだけでも刺激的な光景だったが、限界まで膨張したペニスを股間にびたと押しつける。

「！」

くちゅ、と火照った秘裂が割れて、肉茎をサンドイッチにした。

「どう？ これならイケそう？」

含み笑いして、音羽の腰が信じられない速度で動きはじめた。

自分の太ももと姉のヴァギナに密着されて、変則的な角度で亀頭を擦りたてられる。たまらない刺激だった。

「んあぁっ、な、なんか絡みついて……す、すごいよっ」

最後に残った理性は、あっけなく崩壊した。

「ほら！ ほら！ ほら！」

「あつ、あつ、ああつ」

「はやく出しなさいよ！」

音羽は艶然と笑って命令した。

「くあああああ！」

祐太は雄叫びをあげ、頭の中が真っ白にスパークした。

甘酸っぱい衝動が弾け、愉悦の塊が強制的に尿道を駆け抜けていく。我慢していたことが、かえって快楽を増幅させ、亀頭が爆発したかと思うほどだった。

「す、すご……祐ちゃんの出した精液……熱い」

陶然とした表情で、音羽はつぶやいた。

おびただしい精液が彼女の腹部を汚し、豊かな乳房にまで飛んでいる。

「お、音姉……」

最初の勢いはなくなっていたが、噴火したペニス、びくつ、びくつ、と痙攣をつづけ、先端からゼリー状の白濁汁を滴らせていた。

音羽は、愛しそうに亀頭を手のひらに包み込んだ。

「さあ、洗い流して綺麗にしましょうか？」

慈愛に満ちた、優しい笑顔だった。

第三章

弟よ、もっと甘えなさい！



著：天姫あめ
画：牧だいきち



書き下ろしアフターストーリー！
姉、Christmas!

押しかけ嫁との
切ない冬恋物語

ぶちばら文庫06
夜空野ねこ 著
refeia 画
あるてみす。 原作
定価 670円 (税込)

あしすのっ!

—What knowing the end, we ...—



1月上旬 発売予定

ぶちばら文庫08
布施はるか 著
黒田晶見 画
ORCSOFT 原作
定価 670円 (税込)

愛妻日記



12月23日 発売予定

ぶちばら文庫01
沖田和彦 著
すめらぎ琥珀 画
あるてみす。原作
定価 670円(税込)

好評発売中

特別収録!

書き下ろしアフターストーリー!
姉、spring!

姉、SUMMER!
おん♡おん♡